

事件はいつ起こるか

「金融経済学」と聞くと、つい難しそうで敬遠しがちですね。そもそも、ふだんの暮らしの中で、どんなふうに関与しているのでしょうか？今回はものや人などが持ち合わせているであろうリスクについてどのように考えればよいか、また付き合えばよいかというお話です。

誰しもある紛失の可能性

何年前になるが、東京の御徒町で財布が見当たらなくなり、交番に駆け込んだことがある。現金はともかく、カード類が心配だ。交番の警官がすぐさま銀行やクレジットカード会社の電話番号一覧表を出してきてくれて、しかも交番の電話を使ってカードの使用中止の手續をしてよいと言われたのは、携帯電話を持ち歩かない私には涙が出るほどありがたかった。さつそく自分の記憶にある限りのクレジットカードと銀行のキャッシュカードをすべて使用停止にしたから、幸いにも不正使用は防げたのである。

大事には至らなかったとはいえ、この事件か

らの損害は少なくなかった。いくばくかの現金は戻ってこないし、おろおろと電話をかけたのは時間の損失であり、不正使用を心配して神経をすり減らしたのもわずらわしいことだった。もちろん警官を煩わせたことも忘れてはならない。しかも、しばらくの間私はクレジットカードやキャッシュカード無しで生活する羽目になり、それはそれなりに不便だったし、こんなことを何度も続けていけば、早晚銀行やカード会社への私の信用はなくなるだろう。

この事件の後、財布を無くすなどという馬鹿なことが起こるのは、注意力が散漫だからだと家人にたしなめられた。しかし、これに対して私にはささやかな反論がある。たしかに、とても注意深い人が、ある特定の日に財布を紛失する確率はとても小さいであろう。し

京都大学 経済研究所 教授

梶井 厚志 かじい・あつし

1963年広島県生まれ。1986年一橋大学経済学部卒業。1991年ハーバード大学大学院卒業。

Ph.D.in Economics。ペンシルバニア大学助教授、筑波大学社会工学系助教授、大阪大学社会経済研究所を経て、現在京都大学 経済研究所 教授
著書：『ミクロ経済学：戦略的アプローチ』（梶井厚志、松井彰彦共著）日本評論社、『戦略的思考の技術：ゲーム理論を実践する』『故事成語でわかる経済学のキーワード』ともに中央公論新社、近著に『コトバの戦略的思考』ダイヤモンド社（10年2月発刊）など



かしながら、いくらこの確率が小さくても、紛失の可能性が皆無ではないのだから、この人が未来永劫絶対に財布をなくさない保証はない。要するに、いくら注意深い人であっても、財布を無くすことから無縁ではありえない。すると、たった一度財布を無くしたということから、私が注意力散漫な人間であると直ちに結論することはできないはずだ。

見方を変えれば、いずれ財布は無くなるだろうという予言は正しいが、正しくてもその人の注意深さについての含意はないから、この予言にたいした意義はないということだ。財布が無くなるかどうかではなく、どれだけ近い将来にそれが起こるのか、あるいはどれだけ頻繁にそれが起こるかが、より本質的な論点なのである。

財政論議

さて、先の参議院選挙のころからであろうか、わが国の財政が持続可能なのかという議論が盛んになってきた。日本の国債残高といえ、すでに過去に例を見ない水準に達しているだけではなく、現時点においてはこれが縮小するどころか増加がとどまるような具体的な道筋も見えていない。議論が活発になってきたのは、この調子で借金を増やしつづければ、さすがに持ちこたえられないのではないかという不

安が共有されてきた証拠であるといえよう。

ただし、国債は国の債務であるが、同時に国はさまざまな債権も持っているから、国債残高すなわち政府の借金というわけではない。3000万円のローンをかかえている人が1000万円の銀行預金を持つていれば、実質的な借金は2000万円になると同じ理屈で、実質的な国の借金の額は国債残高よりもかなり小さい。しかし、その実質的な借金の額にしても、過去になかった水準にまで膨れ上がっていることは事実としてよいようだ。

国は一般の家計と異なり、いくらでも借金ができるという説もあるようだが、すくなくとも実質的な借金に関して言えばこれは誤りである。借金というのは、将来の返済を約束することで、現在のモノ（財やサービス）を消費するということである。そのため、世界中に現存するモノの総量を超えた借金をすることは原理的にできない。これに関しては、国であろうが個人であろうが事情は同じなのである。

もちろん、現在の借金の額はこの理論的境界に比べればごく微小な数字といつてよい。しかしながら、この限界があるがゆえに、実質的な借金が無尽蔵に増え続けることはありえないということがわかる。したがって、特段の対策も採らずに借金を増やし続けるうちに、いずれは何らかの事件が起こるはずである。す



なわち、国がいくら借金を増やそうとしても、実質的な借金を増やすことができなくなるようにはならずだと予言できるのである。

持続可能性論議の本質

しかしながら、これでは私の財布がいずれは無くなるだろうと予言するのとあまり変わりはない。つまり、国が借金を増やせなくなるような事件がいずれ起こるのかを熱心に議論しても意味がなく、その事件が何時どのような

事件はいつ起こるか

な形で現れるのかというところが本質的な論点である。ただし、これはたいへん深い問題でもある。日本の財政の持続可能性について、著名な経済学者たちのあいだでも意見の一致をみない理由は、このあたりにあると言えるだろう。

もともと、どのような形でという点については、それほど議論の余地はない。基本的には、新規の国債が売れなくなってしまうか、あるいはすでにした借金の実質価値額が減るかである。

国債が売れなくなってしまうとは、国債の価格が暴落するということである。たとえば、10年後に100万円償還される国債の現時点の値段が下がるということは、10年後に100万円を確保するために、より少ない金額を用意するだけでよいということだ。すなわち、国債回りの急上昇、ひいては金利の急上昇を意味する。

国債は支払いが日本円の金額で約束されているために、日本円の価値が低くなれば、それだけ実質的な借金は減ることになる。極端な話、もし現在の1兆円が来年にはガム1個くらいの価値にまで下がることになれば、現在の膨大な借金などに留める必要さえもなくなる。つまり、現在百円ほどのガム1つに来年は1兆円の価値がつくというわけだから、これは物価が上昇する、すなわちインフレが起こる

ということだ。

難しい問題は、そしてここにおいて意見が分かれるわけであるが、これらの事件が何時起こるのかということである。

より楽観的な人たちは、現時点では金利は低いしデフレが起こっていることに注目する。したがって、そのような事件が起きるのはよほど先のことはらずで、実際にデフレが解消し、金利が上がってインフレが始まってから事件が起こる心配をすればよい。それならば、現在ほかにもつとすべきことがあると考えるのである。

より悲観的な人たちは、このような事件は突然にやってきて、それを事前に予期することはできないと信じる。しかもひとたび事件発生となれば、各所に一気に被害をもたらし、事件解決には少なからぬ費用がかかると考える。したがって、現在から借金を減らす道筋をきちんと整備しておいて、事件が起きる可能性を小さくしておくべきだと論じるのである。

再び事件発生

どちらの意見が正しいのかは、わからない。ただ、私自身には、再び予期せぬ重大な紛失事件が起きてしまった。

今度は自宅の鍵をなくしてしまったのである。海外出張からの帰りで、京都駅まで戻って

きてから鍵がないことに気づいた。その日、家人は遠方に外出中で夜遅くまで戻らず、週末だったのでマンションの管理人も不在だった。時刻はまだ夕方5時ころである。仕方がないから、三条河原町近辺を飲み歩いて時間をつぶし、家人の帰りを待つことにした。しかし、よせばいいのにさまざまな店に行ったから、結局この事件もまた随分と高くてしたのである。

反論むなしく、私はやはり注意力散漫な人間のようである。



連載エッセイ 第7回

くらしの中の金融経済学